

## 「行き来を考察する」という第二章

二無我を要約して示す>行き来の行為と行為するものを考察して人（プトガラ）に本性を否定する>章の著述を説く>  
詳細に説く>業と行為者において、行為をそれぞれに否定する>業を考察して否定する>

[三つの道において行為を共通に否定する]

ここに言う。「仮にまた、生を否定したことから、縁起生の特性である「滅は無い」等が勿論成立はしたけれど、そう見るとしても縁起生は行くことが無く、来ることは無いと成立せられる為に、『行く』と『来る』の行為が否定される為に、よく公認された他の道理を、僅かに述べなければならない。」

述べよう。「もし『行く』という一つの確定が有るならば、それが過ぎた道の様相か、過ぎていないか、歩む（道の様相）であるのか？と考察されようが、一切の様相において正理ではない。」と説く。

先ず、過ぎた（道）を行かず、  
過ぎていない（道）をも行くことは無い。  
過ぎたと過ぎていない（道）以外に、  
歩む（道）を知るとはならない。 1

そこで、道の様相において「行く行為」が滅したものを「過ぎた」という。未だ生じていない「行く行為」を「過ぎていない」とするが、現在「行く行為」が完了することを「歩む」と述べた。

そこで、行く行為が滅したものである「過ぎた」は、現在の行く行為との関係性を述べる「歩む」というこの言葉で述べるとすれば、関係が無い故に、先ず「過ぎた」を「行く。」ということとは正しくない。「先ず」という言葉によって、否定する順序を示す。

「過ぎていない（道）」をも行くのではなく、「過ぎていない」とは、生じていない未来の行く行為を述べるが、「行く」とは現在に起こったことであり、それ故に未来と現在に起こることの二つは非常に別であるので、「過ぎていない（道）」においても「行く」とは正しくない。仮に過ぎていないならば、如何様に行くのであるか？あるいは行くのであれば、如何様に過ぎていないのか？

「歩む」にも「行く」は無い。何故ならば、

「過ぎたと過ぎていない（道）以外に、歩む（道）を知ることはない。」

ここで、行く者が超えたとなったその場所は、その過ぎた場所であるが、超えたとなっていないその場所は、その過ぎていない（場所）である。ならば「過ぎた」と「過ぎていない」より別に、「歩む」という第三の他の道の様相は見ら

れない。何故ならば、そのように

「歩む（道）を知るとはならない。」

一知るとはならず、了解するとならない故に、「歩む」は有るのではない。それ故に、それを行く行為が完了するのではなく「行く」のではないので、「歩む」にも「行く（行為）」は無い。

『何。行きつつある、行く者の足が踏んでいる方向であるそれが、〈歩む〉であるともなるのだ。』と思えば。

そのようではなく、足も極微塵<sup>1</sup>が集まったものである故に、指の先に留まる極微塵の後方であるものは、その過ぎた範囲に含まれ、足の踵に留まる極微塵の前方であるものはその過ぎていない範囲に含まれる。極微塵以外の足も有るのではなく、それ故に、「過ぎた」と「過ぎていない」より別に「歩む」は有るのではない。そのように足について尽く分析をなした如く、諸々の極微塵についても、東西の側の部分と関係する面から分析したまえ。それ故に、直前での「生じつつある」の様相として分析したので、「半分過ぎた」となった「歩む」は正理ではない。それ故に、『歩む（道）』を『行く』のではない。」と成立した。

業を考察して否定する>「歩く」において行為を特別に否定する> [対論者を置く]

ここで言う。『歩む』に『行く（行為）』はまさしく有る。ここに、

或る所へ動くことがそこへ行くことであり、  
それも、何故ならば、歩みにおいて、  
動きは過ぎたのではなく、過ぎていないのではない。  
それ故に、歩むに「行く」はある。 2

そこで、『動き（動作）』とは足を上げ下げするという定義を持つものである。何故ならば、行きつつある「行く者」の動作が有るまさしくその場所に、『行く（行為）』が有るのであるが、その動作も過ぎた道に有るのではなく、過ぎていない（道）にでもない。しかしながら、『歩む』（道）のみに有るのである。それ故に『歩む』のみに『行く（行為）』が有るのであり、何処かへ『行く（行為）』が認められるものが『歩む』であるが、それも行為が完了したものである。それ故に『歩む』のみに行く（行為）は有る。

ここで、一方の『行く』とは認知される意味であり、他（の『行く』）は他の

<sup>1</sup> 極微塵：最も小さな構成要素の粒。地水火風虚空等に分けられる。粒子。

場所へ行ったという意味である。」という。

「歩く」において行為を特別に否定する>それを否定する正理>

[対象を表す言葉と行為を表す言葉において、一方に意味があればもう一方に意味が欠如する]

そのように考察しても「歩む」に「行く（行為）」は無い。」と説く。

「歩む」を「行く」であるとは、  
如何様であれば合理となろうか。

「行く」が無い時、

「歩む」に合理は無い故である。 3

ここで君は、まさしく行く行為を具えることから「歩む」と述べようとし、それにおいても「行く。」と言うならば、ここで「行く行為」は一つであるので、それによって「道を歩む」と勿論述べることになろうが、「行く。」という言葉も歩む行為と関係することは正理ではない—それ故に、

『歩む』を『行く』であるとは、如何様であれば合理となろうか。」とされた。

理由を述べる。

『行く』が無い時、『歩む』に合理は無い故である。」

『行く』が無い」とは、「行く（行為）」と離れる（意味である）。「歩む」とは、「行きつつある」という意味である。御意は、「一つの行く行為は、『歩む』というそれに必需である故と、第二（の行為）は無い故に、『行く。』というこの言葉にも『行く（行為）』が無いことは不合理である時、『歩む（道）を行く。』と述べられることに、完全な言葉の意味が有るのではない。」という—第二の行為が無い故に、「歩む」というただこれのみはあり得るが、「行く。」という言葉に（「行く」は有るの）ではない。

「何。『行く』というまさしくそれと、行く行為が関係する」と主張すれば。

「そう見るならば『歩む』と述べられることに行為との関係が無いので、言葉の意味はまさしく完全ではない。」と説く。

某の主張では、「歩む（道）を行く」という。

その「歩む」には、「行く」が無いという

背理となる。何故ならば、

「歩む（道）」を「行く」のである故である。 4

「歩む（道）を行く。」という対論者の方向であり、「行く行為」が欠如する「歩む」という名を付けられたものに、「行く行為」が依拠したと主張する対論者の説においては、「歩む」に「行く（行為）」が無いという背理となり、その「歩む」は「行く（行為）」と離れるだろう。このように、この「歩む（道）」を（別ものとして）「行く」である故である。「何故ならば」という言葉は、「このように」という意味である。

このように、その対論者の如くであれば、「行く。」というその言葉に（行く）行為が必需である故に、「行く」と離れた「歩む（道）」のみを行くのであり、それ故に「歩む」において「行く（行為）」と離れる背理となるだろう。

それを否定する正理＞ [両方に意味があれば、途方もない背理となる]

「何。『歩む』と『行く。』という双方とも行為と関係する」と主張すれば、そう見るとしても、

「歩む」に「行く」が有るならば、  
「行く」が二つになる背理となろう。  
それが歩むとなったものと、  
そこを行くというものである。 5

或る「行く（行為）」を具えることで、道が「歩む」という言述を得ることになるそれが、一つの「行く（行為）」である。その道を行かせる拠所となった「歩む」においての「行く（行為）」は、二つ目であり、「歩む」に「行く（行為）」が有るならば、この「行く（行為）」は二つになる背理となる。

『行く（行為）』は勿論二つある。何の過失があろうか。」といえは。

この過失が有る。斯くも

「行く」が二つになる背理となれば、  
行く者もまた二人となる。

また、「何故行く者が二人になる背理となるのか」といえは。

説く。

何故ならば、「行く」が無ければ、  
行く者は合理とはならない故に。 6

何故ならば行為とは、疑いなく行為対象、あるいは行為者でも良いが、自らを成立させるものに相互関係したのであるが、この行く行為も行為者に留まるものであり、それ故に「行く者」に相互関係したのである。一人の祭祀が行けば、第二の行為者がいるのでもなく、それ故に、第二の行為者は無い故に二つの行為は無い。それ故に、「歩む（道）に行く（行為）」が有る。」ということは合理ではない。

『仮に、この祭司が居ながら話すこともし、視ることもする時、一人の行為者が複数の行為を具えると見られる如く、一人の行く者に二つの行為が有るとなる。』と思えば。

そうではない。何故ならば、（行為を）成し得るものが行為者であるが、実在物ではない。行為が別であるので、それを成させる「成し得るもの」も別に成立したのであり、「居る行為」によって話す者になるのではない。

もし「一つの実体物である。」といえ。

そのようであるとはしようが、実体物とは行為者ではない。ならば何かといえ、（行為を）成し得るものであり、それも別ものであるのみである。

他にも、単一が同一時に、二つの似た行為の二人の行為者であるとも見られず、それ故に一人の「行く者」に二つの「行く（行為）」は無い。

業と行為者において、行為をそれぞれに否定する>行為者を考察して否定する>

[行く者が行く（行為）の拠所として有ることを否定する]

ここで言う。「仮にまた、勿論そのようであったとしても、しかしながら『祭祀が行く。』と述べられることから、『行く者』である祭祀に『行く（行為）』を認めるのだ。それ故に『行く（行為）』はまさしく有る。（何故ならば）『行く（行為）』の拠所である『行く者』が有る故である。」

述べよう。もし「行く（行為）」の拠所である「行く者」が有るならば、そのようになるものであるが、それは無い。

「如何様に」といえ。

説く。

もし、行く者が無くなれば、  
「行く」は合理ではなくなる。  
「行く」が無ければ、行く者が、  
まさしく有ると、何処でなろうか。 7

『行く者』無く、拠所の無い『行く（行為）』はない。」と既に説いた。それ故に、もし「行く者」が無くなれば一斥けられるならば、「行く（行為）」は有るのではないが、「行く（行為）」が無ければ、因の無い「行く」が有ると何処でなろうか。それ故に、「行く（行為）」は無い。

行為者を考察して否定する＞ [三種の人において、行く（行為）を一般的に否定する]

ここで言う。『行く（行為）』はまさしく有る。（何故ならば）その面よりそれを具えると述べる故である。ここで『行く者』とは『行く（行為）』を具えるのであるが、それを具えることから行くのである。もし『行く（行為）』が無くなれば、『行く（行為）』を具えない祭祀を『行く。』と述べることは無く、杖が無ければ『杖を持つもの』と述べられることは無いが如くである。」

述べよう。もし、「行く。」というこの述べられるもの自体が有れば、「行く（行為）」は有るとなるが、それは無い。何故ならば、

まず、行く者は行かず、  
行く者でないものは行くのではない。  
行く者と行く者でない者より他の  
第三の何者が行くとなろうか。 8

ここで、行きことをするので「行く者」であるが、それは先ず行かない。如何様に行かないのかは、後の三偈によって示すことになる。「行く者でないもの」も行かない—「行く者でないもの」とは、行く行為と離れたものであるが、「行く。」というこの言葉は行く行為を具える者に当たるのである。それ故に、ここでもし「行く者」でなければ、如何様に行くのか。しかしながら行くならば、これは『行く者』ではない」といいたまえ。

もし「その二者より別の者が行くのだ。」といえ、そのようではない。何かについて「行く。」と考える、「行く者」と「行く者でない者」以外の「第三の者」という者も、何があろうか。それ故に「行く（行為）」は無い。

行為者を考察して否定する> [行く者に行く行為を個別に否定する]

ここで言う。『行く者でない者』は行かないが、(行く者と行かない者の) 両者以外の者も行かない。ならば何かといえば、『行く者』のみが行くのである。

これも有るのではない。何故かといえば、このように、

「行く」が無い時に、  
行く者が合理とならないならば、  
先ず、「行く者が行く。」とは、  
如何様に合理であるとなろうか。 9

「行く者が行く。」というこの言葉において、行く行為はまさしく一つであるが、それによっても、「行く。」と述べられることになる。「行く者」と述べられることにおいては、第二の行く行為が有るのではないので、「行く(行為)無く行く者」－「行かずに行く者」というものが有るのではない時、「行く者が行く。」ということは正しくない。「行く。」という言葉がそう(行く行為の意味)であるとすれば、「行く者」というこれはあり得ないので、正理ではない。

「何と。『行く(行為)』を具えたことから、『行く者』はまさしく『行く(行為)』と共にあるのである。」といえは。

「そうであるとしても第二の行く行為は無い故に、『行く。』と述べられることが有るとはならない。」と説く。

或る説では、「行く者が  
行く」という。それには、「行く」の無い  
行く者である背理となる。  
行く者が行くと主張する故である。 10

或る対論者の(主張する)『行く(行為)』をまさしく具えたことより『行く者』である。」という説であり、「行く者が行く」と主張するそれにおいては、「行く者」という言葉が「行く(行為)」と共にあるので、「行く(行為)が無く行く者が行く。」となろう。(何故ならば)第二番目の行く行為は無い故である。それ故に「行く者が行く。」ということは正しくない。

「行く(行為)の無い行く者である」<sup>2</sup>

<sup>2</sup> 「行く…である。」:『根本中論』第2章 10偈 2行目~3行目。

というこの文の「行く者」という言葉は、この「行く行為」の意味に置かれる。

<sup>3</sup>

「何と。『行く者が行く。』という（〈行く者〉〈行く〉という言葉の）双方とも、行く（行為）を具えると主張する。」といえよ。

そう見るとしても、

もし行く者が行くとなれば、  
「行く」が二つになる背理となる。  
それによって行く者として現れるものと、  
行く者となってから、行くことである。 11

或る「行く（行為）」を具えたので「行く者」と顕現され述べられる一つの「行く」と、「行く者」となってから行くこと一何か「行く行為」を行うことであり、これら二つの「行く（行為）」になる背理となろう。「それ故に、行く者が二人にもなる背理となろう」と、前述の如く過失を述べたまえ。それ故に、「行く。」と述べられることは無意味になるだろう。

ここで言う。「仮にまた、そのようではあろうが、そう見るとしても『祭祀が行く。』と述べられることが有る故に、『行く（行為）』は有る。」

そのようではなく、何故ならば、「この者は『行く者』となった者なのか？あるいは『行く者でない』者なのか？あるいはその二者より別の者が行くのか？」というこの分析考察は、祭祀という拠所を持つものである（祭祀を拠所としている）が、一切の様相において合理でもないもので、これは凡々である。

業と行為者において、行為をそれぞれに否定する>行為が有る理由を否定する>[最初の始まりが有ることを否定する]

ここで言う。「行く（行為）は、まさしく有る。（何故ならば）その始めが有る故である。ここで、祭祀は居ることを捨てて行くことを始めるけれど、存在するのではない亀の毛の衣は、始めることも無い。」

述べよう。もし、その始めそのものが有れば「行く（行為）」は有るとなるものであるが、それは無い。

<sup>3</sup> 「行く…置かれる。：「行く（行為）の無い行く者である」の「行く者」という言葉に、「行く者が行く」の動詞の部分にある意味が置かれる。



過ぎた（道）に「行く」の始めは無く、  
 過ぎていない（道）にも「行く」の始めは無い。  
 歩む（道）に始めが有るのでなければ、  
 何処で「行く」を始めようか。 12

もし「行く（行為）」の始めが有るならば、その時、過ぎた道においてか、過ぎていない（道）か、歩む（道）において始めとなるものであるが、そこで過ぎた（道）においては、「行く（行為）」の始めは無い。「過ぎた」とは、行く行為が滅したものであるが、もしそこで「行く（行為）」を始めれば、それはまさしく「過ぎた」にはならない。（何故ならば）過去と現在は相反する故である。

過ぎていない（道）においても「行く（行為）」の始めは無い。（何故ならば）「過ぎていない」未来と現在は、相反する故である。歩む（道）においても有るのではない。（何故ならば）それは無い故と、二つの行為になる背理となる故と、行為者が二人になる背理となる故である。

それ故に、そのように一切において「行く（行為）」の始めをご覧にならず、  
 「何処で『行く』を始めようか。」  
 と説かれた。

行為が有る理由を否定する＞ [行く所である道が有ることを否定する]

如何様に「行く（行為）」が有るのではないかを示す為に説く。

「行く」を始める以前に、  
 何処で「行く」を始めるとなろうか。  
 歩む（道に）は無く、過ぎた（道に）は無い。  
 過ぎていない（道）を行くことが何処にあろうか。 13

このように、祭祀が坐している時、「行く（行為）」を始めることは有るのではない。（何故ならば）そこで「行く（行為）」を始める以前に、そこで「行く（行為）」を始めるとなる「歩む道」の様相は有るのではないが、過ぎた（道の様相）も有るのではない。それ故に、過ぎた（道の様相）と歩む（道の様相）が無い故に、その二つに「行く（行為）」の始めは無い。

『何と。仮にまた〈行く（行為）〉を始める以前に過ぎた（道の様相）は無く、歩む（道の様相）も無いとはしようが、そう見るとしても、そこで〈行く（行為）〉を始めるとなる過ぎていない（道の様相）は有るのであり、そこで〈行く（行為）〉を始めるとなる。』と思えば。

述べよう。

「過ぎていない（道）を行くことが何処にあらうか。」

「過ぎていない（道の様相）とは行く行為が未だ生じておらず、行く行為を始めていないのであれば、『そこで行く（行為）を始める。』というこれは無関係である。」と説くことは、

「過ぎていない（道）を行くことが何処にあらうか。」

というのである。

もしまた、「過ぎた（道の様相）と過ぎていない（道の様相）と歩む（道の様相）に『行く（行為）』の始めは勿論無いが、過ぎた（道の様相）と過ぎていない（道の様相）と歩む（道の様相）等は有るのであり、『行く（行為）』が無ければ、これらは適さない。」といえよ。

述べよう。仮に、まさしくこれらが有れば、「行く（行為）」は、有るとなるものである。『〈行く（行為）〉の始めが有るならば、或る所で行く行為が滅したそれが、〈過ぎた〉と考えられるのであるが、或る所で現在形となったそれは〈歩む〉であり、或る所で生じていないそれが〈過ぎていない〉なのだ。』と考察されるなら、行く行為の始めそのものが無い時、

「行く」の始まりが一切の様相において、

現れることがまさしく無いのであれば、

過ぎたとは何であるか？歩むとは何であるか？

過ぎていないとは何であるか？尽く考察したまえ。 14

一切において「行く（行為）」の始めそのものを認めることが無ければ、誤って三時制において考察することを何故するのか。それを述べる因（理由）である「行く」もあり得ない。それ故に、これは正理ではない。

行為が有る理由を否定する＞ [行く（行為の）対処が有ることを否定する]

ここで言う。『行く（行為）』はまさしく有る。（何故ならば）その対処が有る故である。それに対する対処のあるものは有るのであり、光と闇の如くや、あちらとこちらや、迷いと決定の如くである。『行く（行為）』にも、対処である『住（留まる）』が有るのである。」

述べよう。仮にその対処である「住（留まる）」が有れば、「行く（行為）」が有るとなるが、それは無い。

「如何様に」といえば。

ここで、この「留まる」とは、行く者か？行く者でない者か？その両者より他の者（が留まるの）であるか？と問えば、「一切の様相において適わない。」と説く。

先ず、行く者は居らず、  
行く者でない者は居るのではない。  
行く者と行く者でないものより他の、  
第三の何が居るとなろうか。 15

行く者が如何様に居らぬかは、後の偈によって示すだろう。行く者でない者も居るのではなく、それはまさしく居るのであれば、それに別の「留まる（行為）」による、如何なる必要性があろうか。「一つの『留まる（行為）』によって行く者ではないとなるが、他（のもう一つの留まる行為）によって、居ることになる。」と、「留まる（行為）」が二つになる背理となる故に、留まる者も二人になる背理となるので、前述の過失の如くなる。行く者と行く者でない以外の意味も無い。

ここで言う。「行く者でない者は居るのではないが、行く者であり行く者でない者より他も居るのではない。ならば何かといえば、行く者そのものが居るのである。」

そのようではない。何故ならば、

或る時、「行く」が無ければ、  
行く者は合理とならないならば、  
先ず、「行く者が居る。」とは、  
如何様に合理となろうか。 16

「これが居る。」と述べた時、そこに「留まる」と反する「行く（行為）」は有るのではない。しかし「行く（行為）」が無くとも行く者であると述べることは有るのではなく、それ故に「行く者が居る。」とは不合理である。

行為が有る理由を否定する＞[最後の止まることを否定する]

ここで言う。『行く（行為）』は完全にまさしく有る。（何故ならば）『止まる

『行く (行為)』が有る故である。ここで、『行く (行為)』より止まれば『留まる (行為)』を始めるけれど、『行く (行為)』が無ければ、それより止まるとはならない。」といえは。

述べよう。もし、それよりまさしく止まることが有るならば、「行く (行為)」が有るとなるが、それは無い。このように、

歩む (道) から止まるとならず、  
過ぎた (道) と、過ぎていない (道) からでもない。

そこで、行く者は、過ぎた道からは止まらない。(何故ならば)「行く (行為)」が無い故である。過ぎていない道からでもない。(何故ならば)「行く (行為)」がまさしく無い故である。

歩む道からも止まらない。(何故ならば)それは認識されない故と、行く行為が無い故である。それ故に、「行く (行為)」より止まることは無い。

行為が有る理由を否定する > [留まる理由を否定する]

ここで言う。「仮に、『行く (行為)』の対手となる『留まる (行為)』は無いので『行く (行為)』が無いならば、そう見るならば『行く (行為)』が成立される為に『留まる (行為)』を成立させようではないか。それが成立したので、『行く (行為)』は成立したのである。それ故に、『留まる (行為)』はまさしく有る。(何故ならば) 対手が有る故である。

『留まる (行為)』の対手とは『行く (行為)』であるが、それは有るのだ。それ故に、『留まる (行為)』は有るのである。(何故ならば) 対手が有る故である。」といえは。

これも適わず、このように、

「行く」と、「入る」と、  
「止まる」も、「行く」に等しい。 17

「ここで『留まる (行為)』が成立される為に挙げられた『行く』であるものは、『行く (行為)』と等しく、『行く (行為)』に対する批判と類似する。」という意味である。斯くも

「先ず、行く者は行かず、」<sup>4</sup>

<sup>4</sup> 「先ず、行かず、」:『根本中論』第2章8偈。

等によって、「行く（行為）」が良く成立させられる為に、まさしく理由として挙げられた「留まる」に対して批判を述べた如く、ここでも、「留まる（行為）」が成立させられる為にまさしく理由として挙げられた「行く」についても、「先ず、留まる者は行かず、」等の二偈に読み方を変えて、批判を述べたまえ。

然れば、「行く（行為）」が無いところにそれは無いので、相手である「留まる（行為）」も無い。そのように、先ず（「留まる」を成立させる）「行く」は、「行く（行為）」に類似すると明らかにしたまえ。

『何と。〈留まる（行為）〉とはまさしく有る。（何故ならば）その始めが有る故である。ここで〈行く（行為）〉を捨てて〈留まる（行為）〉を始めることになるが、始めであるそれも、有ると如何様にならないのか。』と思えば。

述べよう。「入る」もまた「行く（行為）」と等しいと述べたまえ。そこで、斯くも前述で、

「過ぎた（道）に『行く』の始めは無く、」<sup>5</sup>

等によって「行く（行為）」の始めを否定した如く、ここでも「留まる所に『留まる（行為）』の始めは無く、」等によって三偈の言葉を入れ替えて、「留まる（行為）」に入ることについても、「行く（行為）」と等しく斥けたまえ。

『何と。〈留まる（行為）〉とは、まさしく有る。（何故ならば）それより止まることが有る故である。ここで、祭祀が留まってから、〈留まる（行為）〉より止まるなら、〈行く（行為）〉を始めるとなり、もし〈留まる（行為）〉が有るとならなければ、それより止まることも無い。』と思えば。

説こう。仮にその「止まる」が有るとなれば「留まる」が有るとなるが、それは無い。何故ならば「止まる」も「行く」と等しく、「留まる（行為）」より止まることも、「行く（行為）」より止まることと等しく斥けられるものである。

如何様に「行く（行為）」を否定するかというと、

「歩む（道）から止まるとならず、過ぎた（道）と、過ぎていない（道）からでもない。」<sup>6</sup>

と、「行く（行為）」に対する批判を述べた如く、「留まる（行為）」を否定するにおいても、「留まりつつある所から止まるとならず、留まった所と、留まらない所からでもない。」と、「行く（行為）」と批判は類似しており、それ故に「留まる（行為）」は無い。それが無いので、『行く（行為）』の対処である『留ま

<sup>5</sup> 「過ぎた…無く、」：『根本中論』第2章 12偈。

<sup>6</sup> 「歩む…ない。」：『根本中論』第2章 17偈。

る(行為)』が有る」と言う者達が「行く(行為)」を成立したと何処でなろうか。それ故に、「行く(行為)」は一切の様相においてまさしく無い。

業と行為者において、行為をそれぞれに否定する>行為を考察して否定する>

〔「行く者」と「行く(行為)」において、同一か別かと考察して否定する〕

他にも、「もし行く者が有るとなれば、それは行く者より別にか、不別に有る有るとなるものであるが、尽く分析すれば一切の様相において有るのではない。」と説く。

その「行く」と行く者は、  
そのものであるとも適わない。  
「行く」と行く者は、  
まさしく他であるとも適わない。 18

また、「如何様に適さないのか」といえば。

説く。

もし、「行く」であるもの、  
そのものが行く者であるとなれば、  
行為者と行為そのものも、  
全く同一になる背理となる。 19

行く行為であるそれが、もし行く者より不別となるならば、その時、行為者と行為もまさしく同一となるだろう。それ故に「これは行為だ。」「これは行為者だ。」という違いにもならないが、切る行為と切る者は同一でもなく、それ故に、『行く(行為)』であるそれは『行く者』である。」としてはならない。

「行く(行為)」と「行く者」がまさしく他であることも、如何様に無いのかを示す為に説く。

もし、「行く」と行く者が、  
まさしく他であると尽く考察すれば、  
行く者の無い「行く」と、  
「行く」の無い行く者となろう。 20

もし、「行く者」と「行く(行為)」がまさしく他であるとなれば、その時、「行

く（行為）」に相互関係していない「行く者」となる。壺から絨毯のように、「行く者」 $n$ 相互関係なく他として成立した「行く（行為）」が認められることとなるが、行為者より別個に成立した「行く（行為）」を捉えることも無いので、『「行く（行為）」より行く者はまさしく他である。』ということは正しくない。」というこれを、良く証成したのである。それ故に、斯くも、

まさしく同一事物か、  
 まさしく他事物として、  
 成立したものが有るのでなければ、  
 その二つが成立したとは如何様に有ろうか。 21

「行く（行為）」と「行く者」であるものに、斯くも説かれた方法で、同一本質か、他である本質の成立が如何様にも有るのでなければ、その二つは他の如何なる様相として成立したとなろうか。まさしくそれ故に、

「その二つが成立したことが如何様に有ろうか。」  
 と説かれ、『〈行く（行為）〉と〈行く者〉の二つが成立したことは無い。』という御考えである。

行為を考察して否定する> [「行く者」とする行為に、第二の行為の有無を考察して否定する]

ここで言う。「ここに、『行く者である祭祀が行く。』とは、世間で公認されている。そこで『言説者が言葉を言う。』『行為者が行為をする。』と斯様に公認された如く、『それによって行く者であると顕かにする、その〈行く〉が行く。』というものでもあるので、斯くも述べられた過失にはならない。」

これも有るのではなく、何故ならば、

或る「行く」によって、行く者であると顕かになる、  
 その「行く」は、行くのではない。

「行く者」になった、「行く者である祭祀」であると顕かにする、その「行く」は、行くのではない。「そうであるとならない」あるいは「行為するものではない」という意味である。このように、

何故ならば、「行く」の以前には無い。

その「行く（行為）」の以前とは、それが行く以前である。もし「行く（行為）」

以前に「行く者」が成立したならば、それはそこへ行くとなるものである。

「如何様に」といえば、何故ならば、

何が何処へ行くとなろうか。 22

或る祭司が、(彼とは) 別他の意味である或る村や街へ行くと見られるならば、その如く、或る「行く(行為)」によって「行く者」と述べる以前に、それが行くとなる何か、「行く(行為)」に相互関係しない「行く者」とは、有るのではない。

『如何に。或る〈行く(行為)〉によって〈行く者〉であると顕かになる、まさしくそれは、ここで〈行く〉ではなく、ならば何かといえ、それより他のものが行く。』と思えば。

これも有るのではなく、何故ならば、

或る「行く」によって、行く者であると顕かになる、  
それより他が行くのではない。  
何故ならば、一人だけの行く者において、  
「行く」が二つとは不合理である。 23

行く者となったそれ—或る「行く(行為)」によって「行く者」であると顕かにするそれ(「行く(行為)」)より他も、行くのではない。(何故ならば)二つの「行く(行為)」になる背理となる故である。

それによって「行く者」であると顕現させる「行く(行為)」と、「行く者」になってから「他の何かが行く。」という—この「行く(行為)」が二つになる背理となるが、一人の「行く者」に二つの「行く(行為)」も無いので、これは正しくない。

これによって、「言説者が言葉を言う。」や、「行為者が行為をする。」ということも斥けるのである。

詳細に説く> [業と行為者において、行為を共通に否定する]

それ故にそのように、

行く者であるとなった者は、  
三様相の「行く」を、行くことをしない。



そうではないとなった者も、  
 三様相の「行く」を、行くことをしない。 24  
 そうであり、そうではないとなった者も、  
 三様相の「行く」を、行くことをしない。

そこでここに、行かれるもの（対象）から、「行く」という。そこで「行く者になった者」は、行く行為を具える者である。「行く者ではないとなった者」は、行く行為と離れる者である。「(行く者) であり (行く者) でないとなった者」は、両方の本質である者である。その如く「行く」も、行く行為と関係する面から三様相であると知りたまえ。

そこで、「行く者」であるとなった者は、「そうである」と「そうではない」と「そうであり、そうではない」の、三様相の「行く」において行くことをしない。これも、「業と行為者を考察する（第八章）」より説くとなるだろう。その如く、『行く者ではないとなった者』も、三様相の『行く』に行くことはしないが、『(行く者) であり、(行く者) ではないとなった者』も、(行くことを) しない。」と、まさしくそれ（第八章）より示すとなるだろう。

章の著述を説く > [まとめ]

何故ならば、そのように尽く分析したならば、「行く者」と「行かれるもの（道）」と「行く（行為）」は有るのではなく、

それ故に、「行く」と行く者と、  
 行かれるもの（道）も、有るのではない。 25

という。

行き来の行為と行為するものを考察して人（プトガラ）に本性を否定する > [了義の教証と合わせる]

斯くも『聖阿差末菩薩経』より、

「尊者舍利子よ。『来る』というそれは、集める言葉である。尊者舍利子よ。『行く』というそれは、斥ける言葉である。それに集める言葉が無く、斥ける言葉が無いところに、来ることも無く、行くことも無い。来ると行くが無いことが、聖者方の『行く』である。」

と説かれた如くである。もし、種子そのものが芽へ転移するのであれば、それは種子であり芽ではないことと、恒常である過失の背理になるだろう。あるいは芽が他から来るならば、無因である過失の背理になるが、無因とは生じるのでもなく、ロバの角の如くである。まさしくそれ故に、世尊も

「種子があれば、芽はかの如くであり、種子であるものは、芽そのものではない。それより他ではなく、それでもない。そのように恒常ではなく、断滅ではなく、法性である。」

ということや、

「印章より印章の凸部は映るけれども、その印章が移行したと認められることも、有るのではない。そこにそれは無く、他にではない。そのように有為は、恒常が無く、断滅が無い。」

ということや、

「鏡面や穀物油の諸々の器を、化粧した女性が見たならば、その幼子はそれに欲望を起し、欲望を満足させる為にも、酷く走り回る。(女性の)面は、そこにも移るのではなく、映った面影には、全く(女性の)面は見つからない。それらの蒙昧な者達が欲望を生じさせられるように、一切法(現象)はその如く知りたまえ。」

と説かれた。

斯くも『三昧王経』よりも、

「その時、悪業無く十力を具えた、その勝者はこの最高の禅定を説かれる。有(輪廻)の衆生は夢のようであり、ここに誰も生まれず、死ぬことは無い。有情である人や、命者も見出さず、これらの法(現象)は、水面の泡や浮き木に似ている。幻のようで虚空の稲妻に似ており、水面の月に似て逃げ水の如くである。幾らかの人がこの世間でも死んで、他の世間へ移行して行くことは無いけれども、為された業はいつ時も無駄にはならない。輪廻であろうとも白黒(の業)の果は熟す。恒常としてではなく、断滅するとならず、業を積んだことは無く、留まることも無い。それも、為して(結果に)触れるとならないのではない。他者が為した(業の結果)を(自らが)感受することも無い。移行することは無く、後に再び来ることは無い。一切は有るのではなく、無いのでもない。ここで見解の在処に入り込むことは、清浄ではない。有情の行いは優れて寂靜であり、入り込むものは無い。三有(界)は夢に似て、精髓が無い。速やかに壊し、無常で幻の如くである。来ることは無く、ここより行くことも無い。流れは常に空虚で、無相である。如来の享受される境である、勝者の功德とは、無生、寂靜、無相の居処である。力と陀羅尼等と、十力の力。これは仏陀が迦楼羅の如くである最高の性質である。最勝の善法である功德を積まれ、功德と智慧と陀羅尼と最勝力と、神変と最勝の変化と、最勝の五神通を得られた聖者の仕方である。」

と、詳細に説かれた如くである。その如く、

『生者達よ。何処へ行くのか?何処から来たのか?』

## 頭句論 [第 2 章]

彼らが言った。『尊者須菩提よ。何処へも行くことは無く、何処からも来ることは無い故に、世尊が法を示されました。』  
と説かれた。

行き来の行為と行為するものを考察して人（プトガラ）に本性を否定する＞ [章の名を示す]

阿闍梨月称の御口より綴られた頭句より、「行き来を考察する」という第二章の解説である。

DECHEN 訳